

■ 書 評



向精神薬と妊娠・授乳

伊藤真也, 村島温子, 鈴木利人
編
南山堂
2014年9月 221頁
本体価格 3,500円+税

妊娠と薬物の関係は悩ましい。妊娠した女性にとって、服薬すれば何らかのかたちで胎児に影響があるのではないかと考えるのは普通である。問題になるのはその影響がどの程度か推測することが難しいことである。妊娠に気づいた時点ですでに服薬していた場合は、さらに事態は複雑である。とくに服用している薬物が向精神薬であるときには、簡単に中止すればよいということにならない。中止による症状の悪化が予想されるときには、妊娠の継続自体が難しくなるからである。また、精神症状を抱えながらの妊娠継続自体が、胎児に好ましくない影響を与えることもあり得よう。しばしば臨床場面では、治療開始時に限らず、さまざまな治療段階で、薬物の胎児への影響や、授乳の可否、さらには妊娠継続の適否まで、患者やその家族から問われることがある。

したがって、妊娠可能な年齢の女性患者を診察する場合には、薬物の妊娠・授乳への影響を事前に十分知っている必要がある。しかし、その情報は必ずしも収集しやすいものではなく、また得られた情報をどのように評価すべきかも容易ではない。たとえば、医療訴訟などで治療の基準とされることのある薬物添付文書の記載は、「治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること（妊娠中の投与に関する安全性は確立していない）」などとなっており、実際の臨床場面ではまったく役に立たない。一方、薬物の副作用を羅列的に収集した本も出版されている。しかし、これらの本は対象が向精神薬に限定しないためにハンドブックの形式をとっており、一般に大著で高価である。病院の薬剤部に参照図書として1冊置いておき、辞書のように使われることを想定しているためであろう。また薬剤師が執筆していることが多く、記述は正確で漏れがない反面、情報が羅列的になりやすく、それをどう臨床で評価するかについてはあまり書かれていない。精神科の

臨床家としては、薬物は主として向精神薬を対象とし、薬物情報に詳しい薬剤師と妊娠した女性患者を実際に診察している精神科医が協働して執筆し、かつまた診察室の机の上に常備できるような書籍を待望していたところである。

本書はまさにこのようなときに時宜を得て出版された書籍である。取り扱う薬物は主として向精神薬であり、対象は妊娠中あるいは授乳中の精神科患者である。編者はそれぞれカナダと日本で胎児薬物毒性の情報提供サービスのシステムを作られた小児科医、および精神科患者の妊娠出産に詳しい精神科医からなっている。各執筆者は薬物の催奇形性などに詳しい小児科医、薬剤師、および精神科医である。国立成育医療センター内にある「妊娠と薬情報センター」の活動に携わっている職員の先生達が執筆者に連なっているのも頼もしい。価格も医学書としてはリーズナブルである。全部を読み通し、どこにどのような記述があったかを覚えておくことができる程度の厚さでもある。

全体は4部からなっている。書評子に興味を持ったのは、海外とわが国で薬物副作用への患者の態度の違いについて記述された部分である。わが国では薬物の催奇形性などに関して敏感で、ややもするとゼロリスクを目指して薬物中止の方に傾きがちである。しかし、その反面インフルエンザに対する抗ウイルス薬投与などに対しては海外よりも積極的であるという。精神面に作用する向精神薬の場合は、患者の態度はより複雑となることが予想される。実際、極端なゼロリスクを求める患者やその家族に対して、中断による症状の悪化のリスクを説明しようとして難渋された治療者もいることであろう。個々の患者に合わせたリスクの評価が必要なことはいうまでもないが、そのためにはきちんとした情報を提示する必要がある。そのときの参照図書として本書は十分に活用可能である。

本書の特徴は第4部にある症例集であろう。ここではさまざまな精神科患者の妊娠や出産、それに関連した薬物療法、治療の際の留意点などが実例を挙げて示されている。中にはもしそのとき治療者が自分であつたらどうしようと困惑してしまいそうな症例も報告されている。発達障害の夫を持った健常発達女性の出産と育児が紹介されているのは貴重である。また生育医療研究センターの執筆者からは「妊娠と薬情報センター」の適切な利用方法なども紹介されている。まさに、妊娠・授乳と向精神薬についてのさまざまな問題とそれへの対処法がもれなく書かれているといつてよいであろう。精神科の診療机の上にいつも置いておきたい参考図書として強く推薦する。

(仙波純一)